

特集・橋梁

橋梁構造委員会 土木学会誌編集委員会

橋は古くから、文学、芸術作品にも取上げられて、ひとびとに心のうるおいを与えてきた。また、今に残るローマ人の水道橋を初めとして、歴史に残る時代の遺産としての役割を果たしてきた。これは、橋が自然環境の中で人の目にふれることの多い構造物であり、その造形も多彩でありうるためであろう。

近年、開発の波によってわが国においても橋梁技術の進展はめざましいものがあるが、上述のような視点から考えて反省すべき点はないだろうか。現在の日本の政治、経済社会の状況に似て、バランスを失ったうわべだけの成長を誇っていることはないだろうか。

わが国の橋梁工学は、近代土木工学の中で重きをなしてきた分野であった。橋がほとんどあらゆる種類の外力を受け、また多様な構造型式を対象とするがゆえに、たとえそれが交通路の中の一部を占めるにすぎないとしても、構造物のもっとも代表的なものにあげられて然るべきであろう。この意味で、橋梁工学の進歩はより広く構造工学の進歩と考えることができよう。

現在土木学会では、橋梁構造委員会、コンクリート委員会、耐震工学委員会などかこの分野に関連した調査研究活動を行なっているが、学会外にもいくつかの関係協会がある。国際的には、本特集にも紹介されている IABSE が土木・建築を含めた構造工学者の国際学会として存在しているが、組織としての研究活動についても国内の態勢を再検討すべき時期と思われる。

門前架橋工事が進みつつあり、本州四国連絡橋計画もようやく実現の一步を踏みたしたいま、橋を直接の専門とする人はかりでなく、土木技術者のすべてが、以上の観点から現在のわが国の橋梁工学の現状を知っていたたきたいと思う。また、あわせて、そこに内在する問題点の批判を行なうことによって、橋を中心とした構造工学のより正しい発展をはかりたいと考えて本特集を企画した。

